『斯くて空しく泣き居らんには、三人共に餓死するばかりぞ、女なりとて、家計を立て得さる道理なし、今日よりは身を粉にして立ち働き、家を守りて、兄の歸り來る日を待たん、』

と言へば、留女何條異議あらん、是れより二女は鍬を荷ひ、鎌を携へ、毎日、野に出でゝは、田畑を耕へし、蔬菜を作る。

美加女は留まりて家を守れど、是れとて手を束ねて遊ぶにはあらず、糸を紡ぎ、綿を繰り、外に出づれば、牛馬の糞を拾ひて持ち歸るなど、幼き身にも、只管家の爲め好かれかしと心を盡す。

額の汗には、珠の光を放つ、姉妹二人心を合はせ、身を碎きて、立ち働くものから、麥の出來、米の稔も、他人に劣らず、耕作の餘暇には、姉は機を織り、妹は糸を繰りて、内職となし、官の年貢は滯なく上納し、兄の負債は、次第に返濟するなど、曾て他より指一つ指されず、

『牢の兄は如何ばかりか困難すらん。』

と思へば、夏は涼しき衣を作り、冬は暖かき服を縫ひて差入るゝなど、夫れ〳〵心を用ひ、氣を配れど、其身は三人が三人、裝りも飾らず、振りも構はず。

斯くて寒暑となく、春秋となく、朝は早く起きて、業を勵み、夜は疾く戸を鎖して、身を守れば、近隣の少年も、皆憚かりて近づくものなかりき。

其行狀、女子の模範たれば、藩侯之れを賞して、三女に金若干を賜ふ。

備後の幾美女惡狼を擊ち拉ぐ

備後國神石郡田頭村に幾美女と呼ぶものあり、性質至孝にして、能く父母に事へ、幼少の頃より、常に家業を助けゝる。

寛政三年四月、幾美女十四歲の時、母と與に近傍の山に分け入りて、薪を採る、澗深く、樹繁くして、晝さへ尙ほ暗きも、慣れたる身は、別に淋しとも思はず。

折りしも、そよと吹く風もなきに、近傍の千草、忽ちがさ〳〵と鳴る、幾美女怪みて音する方を見れば、高草左右に搖らぎて波立つ、

『人にもや、いや〳〵人の來る所にはあらず。』

と呟きつゝ、尙ほも目を注ぐ。

突如として一頭の狼、叢中より躍り出で、眼を瞋らし、牙を鳴らし、前趾を擡めて、前なる母に躍り掛からんとす、

『ソレ狼よ。』

幾美女叫ばんとすれども、聲出でず、身を挺んでて、自から惡狼に當らんとす。

此時、母は始めて心付き、駭き慌てゝ、逃げ去らんとし、思はず木の根に躓づきて、仰向けに倒る。

惡狼忽ち躍つて母に飛び掛かり、今や咽喉を目蒐けて咬み付かんとす、眞に是れ危機一髪。

幾美女見るより、赫と逆上せ、傍の杭を引き拔きさま、無我無中にハッシと惡狼の背を擊つ。

一念凝るところ、巖をも貫く、左しもの惡狼も、唯此一擊に擊ち拉がれ、脆くも轉びて、谷間に落つ。

幾美女急ぎ母を扶け起せば、母は駭き極まつて氣を失ひ、呼べど、叫べど、答へもあらず、

『水はなきか、水は。』

と言ひつゝ、四邊を見廻せば、水は脚下の谷間を流れて、潺湲として聲あり、

『オ、彼處にこそ。』

幾美女馳せて谷に下らんとして、又忽ちハッと驚く、

『オ、此處は狼の落ちし所ぞ。』

下らんか、狼あるを奈何、下らざらんか、水なきを奈何。

兎やせん、角やせん、谷に臨みて、思ひ煩ふこと暫し、忽ち奮然として、

『我が命は何かあらん、母の命こそ大切なれ。』

と思ひ極め、死を決して、谷間に下れば、嬉しや惡狼は影さへ見えず。

幾美女始めて意を安んじ、兩手に水を掬びて、そろり〳〵と還り來り、母の口に含ませつゝ、二たび、三たび、耳に口寄せて、

『母上、母上。』

と呼ばれば、母は漸く我れに復りて、忽ち眼をパッチと開く、左れども聲尙ほ出でず、腰尙ほ立たず。

此處に在りては心元なし、幾美女小さき背に、母を搖り上げ〳〵、辛うじて我家に歸り來る。

近隣の壯夫十餘名、此事を聞くより、直に柄物々々を提げて、現場に駈け付け、谷間に下りて、其處此處と搜し索む。

叢中忽ちごそ〳〵と動く、扨てはと思ひて、近寄り見れば、果して一頭の惡狼、脊骨を擊ち折られて、起つこと能はず、前趾にて地を搔きつゝ、蹠り〳〵て逃げ去らんとす。

壯夫等先きを爭うて走り寄り、各〻亂擊して之れを斃し、曳きて村に還り來れば、老幼男女集まり見て、皆舌を卷く。

幾美女の聲譽、是れより頓に遠近に轟く。